

日本の大学におけるフランス語教育の一考察 －日本人と留学生の比較を通して－

A Study of French Language Education in Japanese Universities
— Through Comparison between Japanese Students and Foreign Students —

福留 邦浩[※]
Kunihiro Fukudome[※]

Abstract

This paper is based on the surveys in 2018 and in 2019. It is said that education of second foreign languages is less important than English as global common language: *'lingua franca'*. It is, if anything, the language teachers that emphasize the significance of learning second foreign languages, it is the 'specialists' that ignore the efficiency of learning second foreign languages. On this paper, we examine the possibility of learning second foreign languages from various points of view.

Keywords : second foreign language, French, communication, survey

はじめに

第2外国語とは、一般に大学教育において、英語以外に履修される外国語をさす。言うまでもなく第1外国語は英語である¹⁾。英語教育に関しては、その初等教育への導入をめぐり、2003年の文部科学省の「『英語が使える日本人の育成』のための行動計画」が発表されて以来、今日に至るまで様々な議論がなされている（清水、2004）。この流れの中で、2006年から大学入試のセンター試験にリスニング試験が導入され、2011年から小学校5、6年生での「外国語活動」として英語学習が必修化された。さらに小学校での「外国語活動」としての英語教育は2020年からは小学校3、4年生から必修化され、5、6年生からは国語や算数と同じく「教科」として成績評価されるようになっている（文部科学省HP²⁾）。

このような英語への、いわば国を挙げての取り組みに比べると、いわゆる大学における第2外国語については、極めて厳しい状況に直面していると言わざるを得ない。すなわち、「単位数の縮小」や「科目自体の削減」といった現実がある。

如上の「第2外国語」の状況について、第1章では、大学における「第2外国語」のスペイン語の教員としての立場から泉水浩隆氏の考察を手掛かりとして、第2外国語が直面する問題点について考

[※]日本経済大学経済学部商学科

察する（泉水、2009）。そして第2章以下において、フランス語講師として大学での授業を担当する筆者の授業を一サンプルとして私見を述べてみたい。

まず、泉水氏は「第2外国語」が置かれた状況を「いびつな」「異常な」状況下にあるとし、その理由を①英語偏重主義、②英語以外の外国語教育を取り巻く環境の悪さ、③行われる手直しが改革か改悪かわからない点にあるとしている（泉水、2009：43）。では、泉水氏の議論を参照しながら、日本の大学における第2外国語のおかれた状況を確認することとしたい。

1. 日本の大学における第2外国語の状況

英語偏重主義、と同時に第2外国語の軽視について、泉水氏は次のように述べている。

「大学における第2外国語教育やその意義に対しては、支持派と不支持派があり、昨今の流れを見る限り、後者の方が押しているような観がある（泉水、2009：44）」とし、筑波大学の事例として経済学者の酒井氏（当時筑波大学教授）による「教養科目の一つとしての第2外国語を必修科目の桎梏から解放し、普通の自由選択科目として再出発すべし」との提言を紹介している（酒井、1990：142）。そして酒井氏は自らの専門である理論経済学の分野における学術論文執筆での言語状況について「英語が唯一無比の「公用語」である。…事実として、英語で論文を書き、英語で外国人と議論できなければ、一人前の理論経済学者として認めてもらえないのだ。そして、いまやドイツやフランスの学術雑誌においてさえ、英文の論文が支配的であるというのが偽らざる現状なのである」（酒井、1990：142-143）と述べ、第2外国語については、「①教える側にも学生側にもインセンティブがないこと、②学生側は英語も十分マスターできていないのに、第2外国語を新たに学ぶことをなかば強制されている」（酒井、1990：143-144）と考察する。

第2外国語の危機的状況については英語教育者の大谷泰照氏も次のように述べている（大谷、2007：1）。「…大学のいわゆる第二外国語は今日、それこそ危機的状況にあります。大手の大学では、国立大学でさえも、第二外国語の単位数を削減するところが増えております。小さな新興大学では、第二外国語を必修にしておいては学生が卒業できないとか、実用的必要がないなどの理由で、第二外国語は簡単に必修からはずされております。第二外国語をやらない大学がどんどん増えているということでもあります」と。泉水氏は前述のように英語の特別扱いを指摘していたが、大谷氏によると、この傾向は第二外国語のみならず、実は英語でさえも単位数削減の対象になっているのだという。

2. 現任校における語学の位置付け

ここからは筆者が現任校で担当するフランス語の授業をサンプルに考察を進めたい。ただし対象は2018年度と2019年度に限定させていただく。サンプルを両年度に限定するのは、筆者がフランス語の講座を担当したのが2018年度からであり、後述のアンケートの調査結果がこの両年度のものしか存在しないからである。

現任校のキャンパスは福岡、神戸、渋谷の3つに分かれ、筆者は神戸のキャンパスに所属している。現任校の語学履修カリキュラムは以下の通りである。日本人学生は卒業までに英語4単位と、第2外国語はフランス語・ドイツ語・中国語・韓国語からの選択必修で、4単位、英語と第2外国語合わせ

て8単位を取得することが卒業要件であるのに対し、外国人留学生は日本語8単位を取得するのが卒業要件である。語学の単位は日本語も含めて1単位である³⁾。日本語は週2回、その他の外国語は週1回である。留学生にとっては、日本語が必修外国語であり、それ以外の外国語は(英語を含めて)選択履修の対象となっており、必修ではない。つまり第2外国語履修は、ある意味、日本人学生のためのものであるといつてよい。ここでは2018年度と2019年度の履修状況について見ておきたい。

フランス語ⅠA・ⅠB選択学生内訳

2018年度春学期8名(日本人4名、留学生4名:中国人3名、ウガンダ人1名)

秋学期6名(日本人3名、留学生3名:中国人2名、ウガンダ人1名)

2019年度春・秋学期3名(日本人2名、留学生1名:中国人)

フランス語ⅡA・ⅡB選択学生内訳

2019年度春・秋学期3名(日本人3名)⁴⁾

使用テキスト 『ラ・コープ1』、岩田好司、他、三修社。

次節では、使用テキストとして、なぜ『ラ・コープ1』を選択したのかについて述べてみたい。

3. フランス語の授業のコンセプトとテキスト選定

現任校において2018年度からフランス語を担当するにあたり、それ以前、筆者は大阪府下のO大学K学部においてフランス語の授業を担当していた。こちらも選択必修であったが、半期セメスター制でフランス語ⅠとⅢが前期、ⅡとⅣが後期で連続して履修して単位習得すれば2年で終了する。一つの講座について週2回の授業であるからこちらは第2外国語だけで8単位であった。第1節で触れた大学における第2外国語の状況からすると、O大学K学部は第2外国語の履修削減の流れに抗して健闘していたと言える。

現任校でのフランス語を履修するのは、卒業のための必修科目である日本人学生がほとんどであり、履修人数が少数でも履修者が日本人学生ならば開講されるのに対し、外国人留学生のみが選択してきても、一定人数に満たなければ閉講になってしまう。

日本人対象でどのようなコンセプトでフランス語の授業を行うか、それによってどのようなテキストを選ぶかに頭を悩ませた。前述のように、日本人は卒業のための必修科目であり、必ずしもフランス語そのものに興味関心があるわけではないことが予想された。一方、外国人留学生にとっては必修ではなく、あえて選択してきているのであるが、こちらも必ずしも高い学習意欲に裏打ちされた学生ばかりとは限らない。

これまでフランス語教育に関する研究会に数回出席し、気鋭の教員たちの授業での実践例の紹介があった。そこでは第1節で述べたような第2外国語の置かれた状況への危機感から、いかに充実した内容のフランス語を、効果的な方法で教えるかという内容が多く、最先端の内容を最先端の方法で教えれば、学生のモチベーションもあがるはずだという信念のようなものが垣間見られた。もちろん、学生によってはそのようなのであることは筆者も理解しているし、筆者もこれまで他の大学で教えてきた

受講者への対応もそのようなものであった。

週1回の授業で、フランス語ⅠA・ⅠB、フランス語ⅡA・ⅡB連続して受講しても2年で終了する。O大学K学部も同じであったが、こちらはまだ週2回の授業であったため、学生と相談しながら、仏検受験を目標にした授業を実施するなどできたが、現任校ではそれも難しい。いちおう、フランス語学習1年目の春学期（前期）は簡単な自己紹介が出来るようになることを目標にしたが、教員と各学生が一对一の座学は避けたかった。週1回であるならば、フランス語を習得することよりも、フランス語を介して、他人とのコミュニケーションをとる時間、日本人と外国人留学生が一緒にいる教室空間では、えてして日本人は日本人だけ、外国人留学生は留学生で、それも同じ国籍の学生同士で固まるきらいがあるので、なおのことコミュニケーションをとることに重点を置いた指導をしたいと考えた。

そこで注目したのが『ラ・コープ1』であった。理由は「協同学習で学ぶフランス語」という副題に惹かれたからであった。日本人留学生と外国人留学生が協同して新しい言語にチャレンジすることで両者の間の心理的な壁をなくすことは難しくても低くすることが出来ればと考えたからである。

以前から、できるだけ、受講者への発問を多くしてコミュニケーションを図ろうとはしていたが、受講者相互のコミュニケーションにかけるきらいがあった。その点を「協同学習」に主点を置いたこのテキストは解決してくれるのではないかと考えたのである。

このテキストが、単にフランス語の学習を通して異文化を体験するのみならず、（たとえ日本人同士でも）異質な他者とのコミュニケーション体験を重視する姿勢を持って、日本語でのやり取りが練習問題に組み入れられていたり、必ずしもフランス語にこだわらないグループでのプレゼンテーションなどからもうかがうことができた（岩田他、2017：26, 51）⁵⁾

筆者を含め、多くのフランス語教師は受講者のフランス語力を高め、フランス語圏に関心を持ってもらうことに主眼を置いて授業を行うが、このテキストの狙いはそこにはないような気がすると言っては言い過ぎであろうか。と言って、実践的なフランス語の学習も十分に行うことができることは言うまでもないことである。

4. フランス語授業開始

2018年4月フランス語ⅠAがはじまった。フランス語ⅡAは前年度のフランス語ⅠA・ⅠBの受講者がなく閉講されていたので受講者なしであった。フランス語ⅠAの受講者の内訳は第2節で触れたとおり、日本人4名と外国人留学生4名である。外国人留学生は中国人3名とウガンダ人1名であった。男女の内訳は、日本人は全員男子、中国人1名は男子、2名は女子、ウガンダ人は女子である。『ラ・コープ1』を使用するにあたっての懸念材料は受講人数が少ないことであった。2名のペア練習ならまだしも、4人ずつのグループをつくるのは難しい。幸いなことに8名の受講者がいるのでちょうど2つのグループを作ることができた。しかし、これは全員出席した場合が前提であって、実際には欠席する学生も存在した。その場合、1名欠席なら1名足りないグループに筆者自身が入った。2名欠席ならば3人ずつのグループに、3名欠席ならば5人で一つのグループに分けた。そんなに休むことはほとんどなかったが、公欠や体調不良など、やむを得ない事情で臨機応変の対応を余儀なくされる場合もあった。

このテキストの特色は、教師ができるだけ教えない、受講者同士で教え合うという点にあると思われる。フランス語の読みも、最初から教えず、受講者に「めちゃくちゃ読み」をさせて、正しい読み方を後から教えるというのは、自分の読み方のどこが間違っていたのかを自分で確認し、つづり字の読み方の規則を自分で発見していくことになり、有効な方法だと思った。ただ、効率性はよくない。しかし、つづり字の読み方を一方的に教えてつめこんでも、受講者が消化不良を起こしてしまっただけでは意味がない。ここは教師の側の根気と忍耐が問われるところである。

グループ学習であるが、これは日本人と外国人留学生が混ざるように配慮した。そうすることで、グループ学習が学習者に与える良い影響が感じられた。まず、テキストは日本語で書いてあるため、比較的日本人学生の方が理解しやすい。そこで、グループの中で日本人がイニシアティブをとり、外国人留学生に対して日本人学生がリードする役割を果たす場面も見られた。また外国人留学生についても、日本語を通じて外国語を学ぶという点において、日本語能力の向上に資するのではないかと考えた。

次節において、今あげたグループ活動での日本人および外国人留学生の特徴についてそれぞれ述べてみたい。

5. グループ活動での日本人学生および外国人留学生

昨今、日本の若者の他者とのコミュニケーションのあり方についてさまざまな議論がなされている。よく聞かれるのは、「昨今の若者はコミュニケーション能力が低い」というものであるが、他者とのコミュニケーションを全く取れないわけではなく、SNSなどのツールを利用する意思疎通や情報共有については、むしろ、高度な能力を身につけていることは指摘される場所である（岡部、2019）。しかし、問題は対面でのコミュニケーションである。櫻井樹吏氏も同様に若者のコミュニケーションの問題点について論じていて、SNSでは問題なくコミュニケーションが取れるのにもかかわらず、面接や仕事上でのコミュニケーションにおいてトラブルを抱えがちである点を指摘している（櫻井、2016）。その問題とは社会人基礎力の不足にあるとしている。

社会人基礎力とは経済産業省によれば「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力のことである（経済産業省HP）。

「前に踏み出す力（アクション）」とは「一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力」のこととされる。「前に踏み出す力」は、さらに「主体性」（物事に進んで取り組む能力）、「働きかけ力」（他人に働きかけ巻き込む力）、「実行力」（目的を設定し確実に行動する力）の3つの要素に分けられる。

「考え抜く力（シンキング）」とは「疑問を持ち、考え抜く力」のこととされ、「課題発見力」（現状を分析し目的や課題を明らかにする力）、「計画力」（課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力）、「想像力」（新しい価値を生み出す力）の3つの要素に分けられる。

「チームで働く力（チームワーク）」とは「多様な人々とともに目標に向けて協力する力」のこととされ、「発信力」（自分の意見をわかりやすく伝える力）、「傾聴力」（相手の意見を丁寧に聴く力）、「柔軟性」（意見の違いや立場の違いを理解する力）、「状況把握力」（自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力）、「規律性」（社会のルールや人との約束を守る力）、「ストレスコントロール力」（スト

レスの発生源に対処する力)の6つの要素に分けられる。

2018年度のフランス語のクラスにおける日本人学生の活動を見てみると、当然のことながら各々によって、能力の発達分野と発達度合いには差があり、一概に日本人学生の社会基礎力について断ずることはできない。しかし、「前に踏み出す力」の「働きかけ力」はあっても、「チームで働く力」の「発信力」が弱くて、理解がスムーズにいかず、グループ学習が空中分解しそうになる部分が見受けられた。自分では理解できていても、それを他者(日本語を学んでいるとはいえ外国人)に分かるように説明するのは正直なところ、教師である筆者も常に頭を悩ませるところである。しかし、お互いに教え、教えられたりを繰り返す中で、「傾聴力」や「柔軟性」、「状況把握力」、「ストレスコントロール力」などを伸ばしていくことが期待された。

外国人留学生についても、日本人と同じことが言えるが、彼らは日本語という外国語でフランス語という外国語を学んでいるという「ハンディ」がある。当初は、日本語を極力使わずにフランス語で授業することも考えたが、第4節で述べたように外国人留学生に対しては「フランス語を通じて日本語を学ぶ」という方針で授業を行った。しかし、授業の回を進めるうちに徐々にフランス語で作業の指示をおこなったり、学習した表現を使っての簡単な会話など、フランス語の比重も増やしていった。ただ、重要な文法の説明は、グループでの相互学習ののち、全体をまとめる形で、筆者が日本語で行う形をとった。

6. フランス語アンケートについて

～2018年度春学期終了時と2019年春学期終了時の比較～

では、授業を受講した学生は、授業についてどのような感想を抱いたのかを具体的に見てみたい。なお、2018年度秋学期および2019年度秋学期は留学生のアンケート資料が得られず割愛したことをお断りしておく。

質問事項

- ① なぜ、フランス語を選びましたか？
- ② フランス語を勉強することに意味を感じますか？
- ③ (意味を感じると答えた人) どんなことですか？
- ④ (意味を感じないと答えた人) なぜですか？
- ⑤ フランス語の授業を受けて感じたことを自由に書いてください。

(1) 2018年度のアンケート

フランス語 I A

実施日 2018年8月2日

実施対象 フランス語履修者(欠席一人、無回答一人)

無記名記述式

本人(3名)

- ① 特に理由はありません。
興味があったから。(2名)
- ② まだわかりません。
感じる。
あると思う。
- ③ 海外での交流や旅行が可能となる。
英語に似ているように見えるが、実際に学んでみると違いがあっておもしろい。
- ④ 回答なし
- ⑤ 意外と面白い。
英語の影響でそのまま発音しそうになる。読まない文字もあるので書くときに間違えやすい。

留学生 (3名)

- ① 興味があったから
もう一つ外国語を勉強したかったから。
フランスが好きだから。
- ② 感じる。
まあまあ、おもしろそうです。
すこし。
- ③ フランス語を勉強してもらうとき (?)
いつかフランスに遊びに行くとき、「こんにちは」ぐらいの言葉が話せるようになった。
- ④ 回答なし。
- ⑤ 思ったより難しかった。
フランス語けっこう難しいと思います。日本語よりもっと難しい感じですけどおもしろいです。

(2) 2019年度のアンケート

フランス語 I A

実施日 2019年7月27日

実施対象 フランス語履修者

無記名記述式

(日本人2名)

- ① 消去法 (1名)
パリサンジェルマンというサッカーチームが好きなので、フランス語に興味をもったので選びました。(1名)
- ② はい (2名)
- ③ いつかフランスに行って生でパリサンジェルマンの試合を見てムバッペを応援したいので。(1名)
- ⑤ とても楽しく学ばせていただいています。(1名)

男性名詞、女性名詞がめんどくさいと思っていたが、まだ、ついていけると感じた。(1名)
(留学生1名)

- ① 先進国の言葉だから
- ② 無回答
- ③ いろいろな勉強は趣味です。
- ⑤ 音声記号を勉強したい、読み方が難しいです。

フランス語ⅡA

実施日 2019年7月25日

実施対象 フランス語履修者(受講者3人中1人欠席)

無記名記述式

- ① なんとなく(2人)
- ② わからない(1人)
特になし(1人)
- ④ 使う機会が少ない(1人)
- ⑤ 読めない(1人)
英語と中途半端に似てて紛らわしかったりするけど面白い。(1人)

以上のアンケート結果から、どのようなことが言えるのか、データサンプルが少ないうえ、継続的に実施しているわけではないし、あまりアンケート調査として有効ではないのかもしれないが、そもそも科学的なデータ集積よりも、受講者がどう感じているかの方に興味があるので、彼らの回答から筆者が感じ取ったことを、日本人学生と外国人留学生の回答を比較して考察してみたい。おおよそ次の6点にまとめられよう。

- ① 留学生のほうが、明確なモチベーションをもって選択している。
- ② 今年度のフランス語Ⅱの選択者のモチベーションが低い。昨年からの継続履修だが、自発性よりも、卒業単位取得のためという点が強く出ている。
- ③ 留学生の継続履修がなかった。単位が2単位ではなく、1単位で、割に合わないと感じているようである。それでも継続して取りたいというまでのモチベーションはないということか？
- ④ 1年間、ゆっくりと、また文法内容も極力減らしたが、あまり達成感が感じられない。教師側の意図としては、ハードルを下げて達成感を持ってもらおうとしたが、期待外れ。
- ⑤ 昨年のフランス語ⅠAのアンケート結果からは、フランス語を実際につかってみたいという気持ちや、フランス語の学習に面白さを感じて、もっとやってみたいという気持ちをもってきていると感じた。
- ⑥ 今年のフランス語ⅠAの受講者からも同様のモチベーションを感じる。

7. 最後に

本稿は2018年度および2019年度の筆者のフランス語授業について、受講者を対象にして実施したアンケートをもとに、大学での第2外国語教育に関する考察である。最後に全体を通した所感を述べたい。

日本の大学全般では、第二外国語の学習環境の悪化と、それへの抵抗として、第二外国語を学ぶ意義が説かれるが、案外、学生は自分なりの意義を見出しているようである。

本学独自の状況からすると、留学生が第二外国語を選択するのはあまり勧めていないのが実情だが、明確なモチベーションを持つ学生少人数を対象にできるのは理想的な学習環境である。

文法項目は極力減らしているが、それでも難しいという声が多かったように感じられる。難しいがおもしろいという感想もあったので、よかったかもしれないが、さらなる学習の継続につながるのか、一抹の不安が残る。実際、2年目の履修者は外国人留学生の履修者が減少している。

今後の課題としては、アンケート実施が不定期であるので、十分な考察ができるだけの情報量が不足しており、もっとシステマティックな調査を実施する必要性を痛感した。また、このアンケートにおいては、教員側が考えているフランス語授業のコンセプトについて、受講者がどれくらい感じてくれているか、あるいはまったく感じていないのかについての調査項目がないので、今後の調査において実施していきたい。

注

- 1) この「第一」、「第二」という序列をつけて外国語を呼ぶところには、外国語の学習を始めた順番という意味だけでなく、外国語の中の重要度の軽重を含意する価値観があるように感じられる。
- 2) 小学校での英語教育は、まだ緒についたばかりであり、「英語が使える日本人の育成」という目標を達成できるかどうかを見極めるには長い時間を必要とするであろう。
- 3) 筆者の勤務する大学において、従来、外国語は半期1単位で、卒業までに4単位必修であり、4期履修することが必要であった。それが2021年度より半期2単位となり、2期履修すれば卒業要件を満たすこととなり、2年目の履修率がぐんと減ってしまっている。
- 4) 2019年度フランス語Ⅱの履修者は、前年度フランス語Ⅰの履修者の中の日本人3名である。
- 5) 「自己開示(自分を見せること)の大切さに気付きましょう」という説明や「説明力を伸ばしましょう」などのキャプションが、単にフランス語だけでなくface to faceのコミュニケーション能力の養成に注意を喚起している。

文献一覧

- 岩田好司他(2017).『ラ・コープ1』、三修社
- 大谷泰照(2007).「国際的に見た日本の異言語教育」『語学教育部ジャーナル=Kindai university Department of language education journal』3, 1-23。
- 岡部達昭(2019).「電話応対でCS向上コラム 第64回 『若者とのコミュニケーション』」、公益財団法人日本電信電話ユーザ協会、
(https://www.jtua.or.jp/education/column/skillup/201904_01/ 2022年9月26日最終閲覧)
- 叶 秋男(2014).「グローバル時代の日本における外国語教育」『北陸大学紀要』第38号。
- 経済産業省HP.「社会人基礎力」、フリー素材「人生100年時代の社会人基礎力」(パワーポイント) 経済産業政策局産業人材政策室。
(<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> 2022年9月26日最終閲覧)
- 酒井泰弘(1990).「第2外国語を自由選択科目に」『筑波フォーラム』28, 142-146。

- 坂本育生(2016).「英語教育における第2外国語学習の効用について：外国語学習の意義を中心として」、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』25.105-108.
- 桜井樹吏(2016).「なぜ若者はLINEでは饒舌なのに面接で話せないのか」、DIAMOND ONLINE、(<https://diamond.jp/articles/-/86044> 2022年9月26日最終閲覧)
- 清水康幸(2004).「英語教育を取り巻く諸状況をどう見るか：『英語が使える日本人育成』をめぐる」、『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』12.3-20.
- 泉水浩隆(2009).「日本（の大学）における第2外国語をめぐる現状と課題 — スペイン語教育を中心に —」、『学苑』No.821.43-52、昭和女子大学近代文化研究所。
- 堀茂樹(2005).「多言語主義—英語以外の外国語を（も）教える理由」、平高史也・古石篤子・山本純一編(2005)『外国語教育のリ・デザイン』
- 円尾 健(1978).「日本人と外国語 —比較文化論的考察—」『フランス語フランス文学研究』33.160.日本フランス語フランス文学会。
- 三浦 淳(2004).「第二外国語教育を壊滅から救い、新たな制度とイデオロギーを生み出すために」『新潟大学人文科学研究』114輯、75-96。
- 文部科学省HP.「1. 小学校における英語教育の現状と課題」、(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1379938.htm 2022年9月26日最終閲覧)。